久慈高校定時制にて

昭和四十一年十一月二十九日

この教室は何年か前、夜あるいは昼、ここに来てこのテーブルの前にもこの黒板にも字を書いたのです。なつかしい教室だと言えばいいのだけれども、正直に言うとなつかしさは充分あるのだけれども、同時に心の底にはなつかしさを打ち消すようなもっと強い現実的な気持ちの方が先に立っています。

まあ一口に言えば私自身もまだ定時制をはなれてはいない、つまり私自身の立場での定時制での現役だという感じが非常に強い。山形村にも現在定時制をもっていますが、その定時制の毎日の歴史、定時制始まってからの歴史の苦しみというものが、姿を変えてはいるけれども、年とともにいろいろな面で強まりこそすれ、現実の悩み苦しみとかつまり定時制の歩んでいる茨の道の苦しさというものが、私自身にもまだそのまま生き続いているものですから、ここに来ても曾て、昔の云々という懐かしさよりも現実の思いのほうが非常にきびしいので、ここは懐かしい所だと言いたいのだけれども、過去を振り返る気持ちは実は出てこない。今日は終業式だから何か話をしろというわけだが、言われなくても私自身何かの意味で、毎日定時制に声のない声で話しかけ話しかけられているというような気持ちがあるのです。今日はそうした気持ちの一端を述べたい。

私は私なりのそういう私は、私なりのそういう悩み、苦しみをもっているのだとどこへ行っても言うしかない。それ以外に私も言うことがない。まして諸君らに何か教えるとか、訓示するとかいうこととは全く正反対のことなのである。むしろ、こちらのほうの悩みを諸君に出して、諸君のほうからお前の言うのは裏側の話、消極的な話であって、表側にはもっとこんな話、人生の積極面があるのだという力づけを与えてほしい。ともすれば、人生の向こう側の斜面に滑り落ちてしまって、新聞で見ると富士山のアイスバーンで若い人達が何人も命を失っているようですが、人生のアイスバーンはいたるところにあるわけです。危なく命を失いかけているのを上から「この綱にすがれ、すがれ」と諸君のほうから、命の綱を投げかけてもらいたい、と思っているわけなのです。

今日は、題目だけは一応体裁上掲げなければなりません。「歎異抄について」ということになっています。これは歴史でお習いでしょうが、親鸞聖人の語録を弟子が書

いたものが前半をなしている。後半は親鸞聖人の述べたことを標準にして、その時代の宗教的異端邪説を批判している。批判するとき何が異端であるかという原理をどこに求めているかと言えば、自分が教えられた親鸞聖人の考えに基づいている。「出家としの弟子」は図書館にありますか、これは小説だから必ずしも歴史的人物そのものでもないようです。作者の倉田百三さんがクリスチャンであること、キリスト教的思想で仏教思想を小説に書いたこと、そこに相当のズレというより、見当違いがある。だがあれが本当の親鸞聖人だというよういい受けとられると、これまた大きな問題を残すと思うものだから、余計なことを申し上げた。

そこで、一体このキリスト教も仏教も宗教であるが、宗教とは一体何なのだろうという疑問。よるわからないのだが、それを心理的な面からいえば「生きている」ということは一つの表現である。

俺は生きている。生きているという証拠はどこにあるかといえば、おのずからやっぱりこうして、こう見るよりしようがないのだね。「どうです。君は生きているのでしょう」とこうは見はしないのだ、生きているとこう見るのだ。では何を見ているのだ。では何を見ているのだ。諸君として表れているところのその奥に、諸君がいると一応思っているのだ。一応ですよ。それならばというのでこう掴んで「こら、君か、君か」と言っても、掴んだのは洋服だね。洋服ではだめだ。では裸にして掴んだ。これ皮膚だね。うんと掴んだら「痛い。痛い」という。それは声だね。あるいは感覚だね。その奥に正体があるだろう。それは骨だ。「その奥にあるのは何だ」という。「俺だ。俺だ」という。それも声だね。だからそれはわからないのだ。わからないのだが、やはり何らかの意味でわかるものがなければ、わからないものがわからないと言えないのだ。困ったものだ。こっちから言えばそうなのだが、諸君の側から言えば自分が生きているという証拠を自分で表現せざるを得ない。

諸君らもなんだか実際わからない。しかし「俺はこういいものだ」と俺というものを自分で確かめてみたいと思っているのだと思う。頭髪の刈り方はみな千差万別だ。そんな苦労をして千差万別でなくてもよいだろうと言うけれども、じゃあ同じように坊主にしたらいいだろうと言うが、なかなかどこの学校でも断髪令というやつはうまるいいかない。下手するとストライキを起こす。学校側からいえば、さっぱりして青年らしく清潔で経済

的だ。だが諸君らの年頃から言うと、それはなかば命懸けのことらしい。

それは表現だね、生きるとは表現なのである。できるなら表現をはっきりさせたいために、差別をつけなければならない。だから学校で「制服制帽をきちんとしなさい」と言うと、かえって違った服装をするものが出てくる。困ったものだ。その制服を着ることが、その学校の生徒であるという表現になるから、あるいはその学生の表現になるのだから、やっぱり制服は着なければならないのだな。弊衣破帽、あんな破れた帽子なら捨てたらいいじゃないか。そうじゃないのだ。破れた帽子だからこそ着たいのだ。それによって人に差別をつける。そこに自分の生きがいを感ずるのだね。破れた帽子を見るたびごとに、ああこれが俺だということを実感する。つまり自分の生を自分で確かめたい。このことは非常に大事なことと思う。何らかの意味のこの生命線、これがなくなると自分で自分の命の確かめようがなくなる。不安ですね。確かめることは安心である、確かめるられなくなると不安である。

この確かめるということをだんだん大きくしてゆく。自分を最大限まで大きくするというと、これは世界だね。これは自然科学的意味でない宇宙全体といってよい。世界と自分とが一つになる。あるいは世界が自分の表現である、というところまでゆけたら、これは一番大きな表現だろうね。もしそういことができるならそこで安んじて死んでもよいという気持ちがおこるのではにかな。この宇宙全体が俺自身の表現なのだ。そんなら弊衣破帽、長髪などそんなものはてんで問題ではない。髪自体、自然そのもの現れ、服装も天然からできた自然そのものである。一切をあげて世界全体が自分の表現出あるということになれば、一番安心だろう。寝ても覚めても、病気になっても失敗しても、善いこと悪いことをしても、どんな目にあってもだね、それがそのまま俺自身の表現だというのならこれほど強いことはないだろうね。

そういう一つの大きな面があり、一方、個は千差万別なのである。一人ひとりすべて違う。相対的な差別というものは、なければならないが、同時にわれわれのこころを一番不安にしているものです。差別自身は必要なのだが、しかもこれがあるから困る。俺は重いが背が低い。あれは病人だが金持ちだ。勉強してもあれの方がテストで五点多い。ああだこうだとあらゆるものを朝から晩まで差別をつける。これがまた悩みのもとだな。つまり条

件だ。全く条件なしの無条件の世界がもしあるならば、これは一つの安心の世界だな。そういう世界　境地、一切の条件からのがれる世界はありうるだろうか。その世界は本当の意味で平等だな。

さらにもう一つ。世界と自分とが対立しているという世界では、何らか、世界から圧迫を受ける。諸君と学校との間だが、離れていれば学校からの圧迫を感ずる。町を歩いていても高校生という誇りを持つと共に、一種の束縛を感ずる。しかし学校と自分とが一つになった、学校そのものが自分の表現なのだと思えば、そのような圧迫は感じないね。それが自由である。俺がいるところ学校があるのだ。俺が毎日学校に往復しているのではなく、学校が毎日俺のところへ往復しているのだという実感を味わえないかね。われわれの命の中に実感できるかという。それが実感できるという。われわれの先祖の人達はそういう実感を、われわれに教えてくれているのです。それは心理的意味です。では生理的な意味では、今日の生理学ではこういうことを教えてくれる。

大脳皮質に新しいのと古いのとがある。古い方は本能的、動物的機能をつかさどる。新しい方は人間特有のもので創造の機能を扱うのである。この創造のな完で一番根本的なものは自分自身を創造することである。これは自分自身を自分で確かめることだ。そのためには表現を持たねばならない。つまり、何らかの形、姿を持っているということである。姿を持っているということは、それによって自分を確かめることになる。年齢的にいうと一二、三歳になるとそろそろ鏡を見るようになる。鏡を見ることによって自分自身を確かめる。そして自分を創りあげてゆく。表現と同時に自分自身が創造されてゆく。創造する力は人間だけに備わっている。そして創造の中で一番大きいものが自分を創造することだ。そこに自由も平等もある。自由平等を自分の中から創りあげてゆく。ただしそれを表現という面からいうと、世界と自分とは一つになるという意味で一つである。そこに自分の方を創るという出方と、世界を創るという出方と二つの形がある。これが仏教とキリスト教との関係であると思う。

キリスト教の方は神が世界をまず創った。世界が先にできあがっているのだ。このとたんに人間という問題が出るのだな。人間が自分を確かめようと思うために、鏡がまずできたというようなものであろう。世界ができた

のに自分がその外にいたのでは困るね。それは世界ではないだろう。やはり自分もその中に入っていかねばならない。そうでないと完全な世界とは言えない。神様は絶対な力をもっているから、この中にいるわけだ。この中におるのだけれども、「おる」だけでは始末が悪いのだね。全体がまずできて、その外に自分ができると、なぜ都合が悪いかというと、これがこの中にいたのでは神様という意味が逆になくなってしまう。神様が世界を創ったということは、何らかに意味で、いちど、自分自身がこれから外へ追い出されていなければならない。はじめからそこにあったのでは困る。神様として区別がつかなくなる。いちど、中にあったものが外へ出るという関係を持たなければならない。苦しい説明のようだけれども、例えばお腹の中に赤ちゃんができた。これ自分の子供には違いないだろうが、あまりにも自分自身であり過ぎるために、自分の子供であるかどうかもわからない。それがオギャーと一度外へ出たとき、あっ自分の子供だと親が抱きかかえることができる。神様は人を創っておいてその創った人間を、一度エデンの園から追い出したのである。追い出しておいて、今度はどうして中に入れるかということに、キリスト教の宗教としての具体的な意味があるようである。そのとき神は自分で創っておいて、自分で追い出すわけにいかぬものだから、そこに媒介者としてキリストをもってきた。神は自分自身姿を現さない。キリストにのみ姿を現わしている。したがってキリストは神と人との中間に立っている。媒介者だな。しかし、問題はどこまでもこの世界の中心は神である。このとき、われわれ人間の個というものは、いつも神と向かい合う対立の関係に入っている。もっと極端に言うと、人間がだんだん増長してくれば、できるなら自分がこの世界の主になりたいと思う。しかし、すでに世界は創られてしまっているのだから、主になるわけにはゆかない。なるわけには行かないのだが自分はなりたい。ここに対立があるわけだな。本来、対立でないはずのところに、むしろかえって対立がある。

　べつの言葉でいえば、神によって創られた世界であるから絶対平和でなければならぬ。平和であるがためにむしろ戦争が起こる。平和だという街頭デモが出てくるわけだね。「平和のために戦い」という極めておもしろいわかったようでわからない言葉が、堂々と世間に生きて動いているのである。これ冗談じゃなしにわれわれの目の前に事実として生きている。それならいっそ、ひっくり

返して、「戦いのための平和」といってもよいのであろうな。その根本に神と人との対立関係がある。どうしても残る。この両者の関係は、例えば「裁き」という。

これは矛盾しているようだが矛盾していない。「愛さねばならぬ」という「ねばならぬ」というところに既に裁いているわけだね。一度追い出したもの愛するのである。「汝の敵を愛せよ」、敵だから愛せるのである。これはなかなか立派なことだとも言えるね。敵を愛するのだから。しかし、愛するものは敵であるということは、これもまた困ったことではないであろうかな。だからそこに対立関係がある。

それからもう一つ。キリスト教ではいつも神という枠がある。どんなに人間が飛び回っても、どこかでそれを監督しているというか、保護しているというかそういう制約がある、限界がある。これから外へ出られぬという枠がある。これは窮屈ではあるが、一方からいうと、生きてゆるわれわれにとっては非常に安心なことでもある。つまり家の周りに塀をめぐらせているのと同じである。塀があるということは、一方からいうと夜外へ飛び出すときにそれは邪魔になるが、外から泥棒が入らぬことには都合がよい。両親という大きな枠の中に諸君が納まっているかぎり、夜飛び出すときには都合が悪いが、大体都合がよい。ただし、そういう枠があることを、人間は生涯念頭を去らないだろう。自分を保護してくれるものがある。有り難いのだけれども、どこか不自由なところがある。保護という枠にはめられているから。

それに対して、仏教の方ではこういうものがない。こういう神がない。枠がない。世界という出来上がったサークルがない。限界がない。この限界のないところを流転の世界という。どこに流れてゆくかわからない。この個人は大きい海に浮かんでいる小さなボーフラのようなものである。ただ流転しているわけだ。どこまで行ったら限界があるか。世界がどこまで行ったら果てがあるかわからない。そういう果てのないところに、自分自身は自分を創りあげて行かねばならない。自分を創るということは、自分の住む世界も一緒に創りあげてゆかねばならない。個から世界を創らねばならない。しかも、その創り方にはどこにも限界がない。一方からすれば非常に頼りないようにも思われるね。どこまで行ったらこれでよいのだというところがない。はじめからこういう一つの枠があれば、いくら遠くても、つまり自分が神と一つになれば、ここに安心が得られる。だがこの世界には、

そういう限界がないのであるから、どこまで行っても最後がないようである。

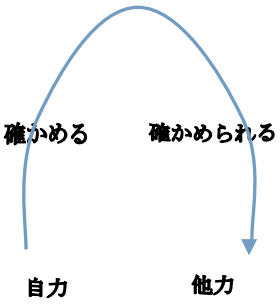
また、平等・自由といっても、キリスト教でいう枠の中でのそれと、枠のない立場でのそれとは、どうも違うようである。どこかやはりニュアンスが違うようだね。「汝の隣人を愛せよ」。枠の中の隣人である。これは横の関係だね。ところが仏教の方では、これ自身を延ばしてゆく、拡大してゆく。こえ自身が世界を創りだしてゆく。だからみんな自分である。隣近所も、みんな自分自身の中のものである。そういうものを包み入れて自分自身が大きくなってゆく。言わば縦の平等であると、無理して言えばいえるだろう。

したがってこの場合の隣人とは、他人との関係でなく、母親が自分が自分の中に生んだ自分の命、つまり新しい命としての赤ん坊を、自分の中に抱きかかえるような意味での愛、慈愛だな。そこに裁きがない。一端、断ち切ったものを愛するのだという裁きがない。自分の命としての赤ん坊、しかも生まれてみれば他人なのだが、それを抱きかかえるようなもの。そこに裁きがないんだね。裁きのない愛を慈愛という言葉で区別できると思う。同じ愛と言っても、ニュアンスが違うことはわかってもらえるだろうね。そんなこと分かったって仕様がないと言えばそうかも知れない。仕様がないだろうが、まあどちらのタイプで日常生活を進むか。どちらの愛で進むか。親子、兄弟、教師と生徒、その他一切の人間関係を慈愛という立場でゆくか。あるいは愛という形でゆくか。単にどちらでもよいという問題ではない。自分の人生を創ってゆくのにどちらがふさわしいかという具体的な結果が出てくることと思う。

宗教というものに対する一つ一つの理解の仕方はあるだろうが、まとめて言えば、世界と自分とが一つになるということだと。一つになるということは、自分自身を自分で確かめるということ、自分の生を確かめることだ。一番最後の確かめ方というこの確かめるということは、どういう確かめ方であるか。それは諸君がテストを受けて答案を書く。自分で充分自信がある書き方をして、自分でこれでよしというので出す。自信がある人はそうだろうと思う。そうだとしても、しかもなお先生の机の上に置くという気持ちはそれは何だろう。「置くことになっているから置く」と言えばそれまでだが、自分で充分確かめたのだ。しかし、その充分確かめるとは一体何であるか。それは先生に確かめられるということである。「確

かめる」ことの最後が「確かめられる」という受け身になる。

言い換えれば、世界と一つになるということの最後、世界が自分の表現であるということの究極は何だろう。こちらの立場でそこまで行ったということは、まだ最後のもう一つにその上が残っている。「これが表現だ」と自分自身が確かめていることは、九分九厘のところまで行ったが、最後の百のところは何であるか。表現が表現自身を忘れるということであろう。あるいは別の言葉で言えば「表現されている」ということであろう。世界が自分の表現であるということは、自分が世界に表現されているというところまでゆかねばならない。そこまで行ったときは、もう表現するとか表現されるということはない。それが本当の安心のところである。それが宗教の道を求めて登ってゆくところだね。最後のここ（図 点イ）に達した時「表現する」と「表現される」ということが一つになる。「確かめる」と「確かめられる」とが一つになる。俺であるけれども俺じゃない。いままで、俺が俺を確かめていたのだが、いつの間にかほっと気が付いてみると「ああ俺は確かめられていたんだ」と。俺が俺を確かめている間にはどっかまだ自由がないね。確かめなければならぬという外からの要求がある。ところが、俺が俺を確かめるのだという汗水を流して悪戦苦闘してここまで到達したとき、もう確かめることは何もなくなってしまった。いや、俺は確かめられてしまったのだ。もう確かめようなどと肩をいからす必要はない。弊衣破帽を大事にかぶっている必要はないね。帽子があればあったでよい。なければなくてもよいのだというのがここだね。この道（図）は確かめる道である、この道は確かめられる道である。「自力」と「他力」だ。一足一足ごとに確かめる。こちらは確かめられる。同じ道なのだが、大きな違い、百八十度の転回がある。ここのところを「信」という。この「信」は、どこか強制された「信」と、何もなくなった「信」とである。「自信」と「他信」とでも言おうか。後者は自分が信ずるのでなく信じられているのである。



例えば、泥棒をして監獄に入る。入ったときまでは人から信じられなければならない。自分は泥棒をしたのであるが、本来泥棒ではなおのだ。自分は善いことをしたいと思うのだが、生活以上飢えに困ってやむを得ず金を盗んだのだ。あくまで自分は信じられよう、信じられようとしているね。つまり自分で自分を信じようといえいる。自分を信じようとすればするほど、世間から「あれは泥棒だ。泥棒だ。」と言われる。ところが一旦監獄に入って刑に服し、ああ悪かったと外に出てしまうと、もう自分が自分を信ずるという根拠がなくなってしまう。ただ信じられているという世界に生きているよりほかに仕様がない。自分が自分を信ずるという世界で失敗してしまった自分が、信ずるという世界が自ら自分の牢獄をつくってしまったのである。その牢獄から解放されたという世界には、もう自分が自分を信ずるという余地はない。もし有りとするならば、それはただ信じられているという世界なのだ。信仰の「信」とはそういうものなのだ。「そんな信などあるか？」と言えば、「ある」と教えられていると言える。親鸞聖人は、そう言ってわれわれに教えられておられる。われわれはそうですか、そういう世界があるのですかと、人の教えをそのまま信じてゆくしか仕方がない。われわれの先祖のいのちが、こういう現実の、動乱の世の中かに大きく生きてゆく道をのこされたのは、そういう意味である。信じられてゆく世界があるということなのだね。

ではプリントを見て下さい。この歎異抄は親鸞聖人の晩年外部からの圧迫もあり、内部的には弟子たちの中に多くの異端邪説が出てきた。団体生活というのは、各人考えが違ってくるものだ。同じ考えで集まったサークル、だからこそ、なお一層、強く内部分裂がくる。もっとも仲のよいはずの者、親子、夫婦がそれぞれ喧嘩。一番始末のよいはずのものが一番始末が悪い。そういうものが宗教団体の中にも出てきたようです。これができたのは聖人の亡くなった後のようです。本来の聖人のご意志はこういうものだったのだと、われわれが勝手にああでもない、こうでもないと間違ったことを考えてはいけないのだということを書いたのがこの歎異抄である。読ませていただきましょう。

序文

ひそかに愚案をめぐらして、ほぼ古今を勘ふるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相続の疑惑

あることを思ふ。
　幸に有縁の知識に依らずば、いかでか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覚悟を以て他力の宗旨を乱ることなかれ。
　よって、故親鸞聖人の御物語のおもむき、耳の底に留まる所いささかこれをしるす。ひとへに同心行者の不審を散んぜんがためなりと。云々。

第一章

　弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたもうなり。弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪悪深重・煩悩熾盛の衆生をたえけんがための願にましまします。しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべらかず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なくゆえにと云々。
　そこで最後に「表現」ということ。ここまできてもひょうげんはあるのかないのか。生きている以上は姿がある。この姿を何らかの意味で表現したい。生きていることはやはり表現なのだね。だから死ぬということは表現を捨てるということなのだろうね。まず自殺について、川に飛び込む。飛び込んでもやはり川の中に姿はある。「諸君、さようなら」と川の中に飛び込んでも、川の中から引っ張り出すとでてくる。引っ張り出さなくても消えてなくなったわけではないのだが、気持ちだけは川の中に飛び込むのだから、一応表現がなくなったと思うのではないかな。生きているということは表現なのだ。真宗ではその表現を一番簡単なもの「南無阿弥陀仏」という。禅宗では「坐禅」である。坐禅というと何か難しいように思うが、生理的に一番完全な姿だそうだ。医学的にも一番健康、長生き、無理がない。心理的、生理的にも無理がない。難しい姿でなく、一番簡単で無理のない姿だと言われている。キリスト教では　私はよくわからないので、間違っていたら申し訳ないが　「祈り」というのが、その表現にあたるのではないか。これ一筋で行く。これが自分の生きているという証拠である。これ善か悪かということではないのだよ。善か悪かのための方便でないのだ。目的を超えてしまっている。方便でないから目的はない。ただそれだけなのである。生きているという、ただそれ自体なのである。念仏、坐禅、祈り、一応われわれの現在の生活の中に生きている。入ろ

うと思えばいつでも入れるというのが、この世界の姿であろうと思われる。

どうも、時間をとって有難うございました。